

行楽の秋

冬号ながら、現^い在^まはまさに秋の行楽時^シ季^ム。そこで、あえてそのいまを話題にしてみたいと思います。

「天高く馬肥ゆる秋」といいます。ここでは、半日とか一日の単位で外出して秋を満喫する、いわば近回りの行楽が発達しました。その伝統は、江戸時代までさかのぼって確かめられます。江戸のとくに中・後期は、庶民の旅が発達しました。それは、幕藩体制が安定したことと、半農半工、半農半商、半農半芸というように、庶民の多くが「農^の間^ま稼^まぎ」（副業）による収入を確保したからです。

「一生に一度の伊勢参り」とうたわれたように、庶民の旅の大勢は伊勢参宮にありました。それは、伊勢が日本列島のほぼ中央にあり、常^と若^こともいわれる常緑の地でもあったから。また、国の祖^お神^やと^がして、天下泰平・五穀豊穰の半ば公的な願目を通しやすかったから。

つまり、旅に出る方便としても、伊勢参宮は、もつとも適していたのです。

たとえば、「一年に一度は金毘羅参り、月に一度はお多賀さま」という言葉が「一生に一度の伊勢参り」のあとに続きます。これは、瀬戸内から紀州（和歌山県）あたりの俚言で、金毘羅さまは、宮島さまにも言いかえて伝えられてきました。また、お多賀さまは、淡島さまとも言いかえられており、婦人の信仰を集めたところから月に一度ともたえられたのです。この近くのお多賀さま参りのようなものが、つまりは遊山ゆざんということになるでしょう。とくに、女性たちには格好の休日となつたのです。

一方で、秋には、「秋草摘み」なる行楽行事がありました。秋の草花を愛で、それをわずかばかり摘んで持ち帰っては家の中や家まわりまわりに飾る。とくに家々が建てこむ江戸の下町では、緑が圧倒的に少なかつたため、路地や玄関まわりに野の草花を飾つたのです。

この「摘む」とは、美しい響きをもった言葉ではありませんか。折る、とも違う。採る、とも違う。つつましい楽しみの風情がそこにはあります。むしろ、自然破壊、環境破壊とは無縁の言葉です。

かつて秋草摘みと並んで盛んだったのが、「紅葉狩り」。山野にモミジを訪ね、落ち葉を拾う。その歴史は古く、もともとは平安貴族たちの風雅な遊びとして発生したものです。それが庶民の楽しみとして広まったのは、江戸も中期以降のことでした。

「紅葉もみじに楓かえで 一歩ごとにながめがかわる」

（『江戸名所花暦』滝の川）。その風情や、現い代まいずこ——。